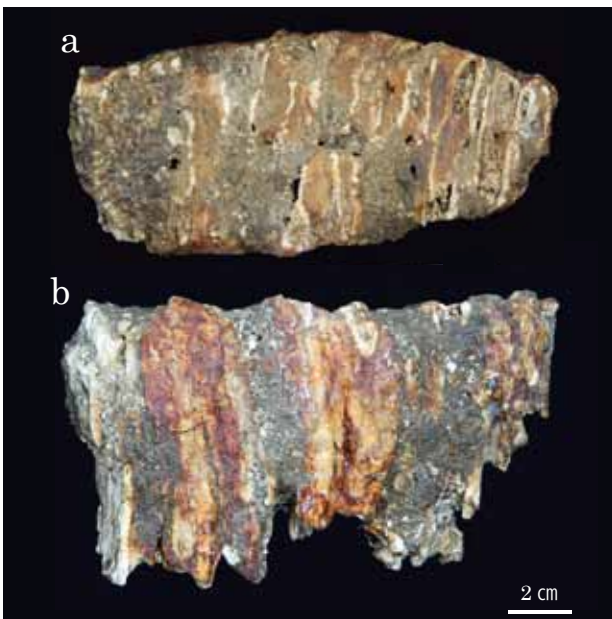


静岡市清水区南矢部で発見されたナウマンゾウ

横山謙二



静岡市清水区矢部で新たに発見された
Palaeoloxodon cf. naumanni の臼歯
a: 咬合面, b: 頬側面

2010年3月に有度丘陵東、清水区南矢部の造成工事現場で、長鼻類の臼歯と思われる化石が、発見されました（詳細は、東海自然誌 12号P 5-13参照）。発見されたものは、バラバラに分解し、とても分類できる状態ではなかったのですが、昨年、宮澤氏によって修復され、その歯の特徴と他産地の標本との比較により、ナウマンゾウ *Palaeoloxodon naumanni* の右下顎臼歯であることがわかりました。

この化石が発見された南矢部周辺では、これまでに、ナウマンゾウの下顎臼歯1本（土，1958）と切歯1本（柴，1991）の2標本が報告されています。また正式な発表ではありませんが、この地域で他に長鼻類の切歯が2本産出したことがあるそうです。おそらくこの化石も、時代的に考慮すればほぼナウマンゾウのものだったと考えられます。

これらの長鼻類化石が産出した、この地域には、約18万年前に堆積した礫層や泥層からなる地層が分布しています。この地層を観察すると、泥層と礫層が互層状に累積し、北東方向に傾斜し堆積しています。この礫層は、河川で運ばれてきた礫が、河口から海に供給され、海底の斜面に堆積したものです。産出した化石は



ナウマンゾウが見つかった地層

一カ所にまとまって産出するわけではなく、産出する場所や層準は異なります。このことから、これらの化石は、死体が腐敗し分解した後、河口から礫とともに流されて、再堆積を繰り返し替えて海底で埋積したものと考えられます。そのためか、産出した化石は保存状態が大変悪く、著しく摩耗しています。また、地下水の影響か、溶結していることが多くあります。おそらく歯以外の骨の化石が産出しないのは、こうした埋積過程と地下水に起因すると考えられます。しかし、このような条件の中で、別個体の化石がいくつか発見されたことは、この地層が堆積した当時、たくさんのナウマンゾウが生息していたということが推察できます。

ところが、これらの化石の産出層準の年代頃は寒冷期（酸素同位体ステージ6）にあたり、全国的に見るとナウマンゾウ化石の産出数が極めて少く、この時期のナウマンゾウの産出地は、この有度丘陵地域を除くと、千葉県佐倉市上別所（下総層群成田層）からの産出しがありません。

この時期以後の温暖期（酸素同位体ステージ5）になるとナウマンゾウは、北上し分布を広げ、最も繁栄した時期と考えられています。この時期の地層は、有度丘陵でも北側に分布し、草薙層と呼ばれています。草薙層からは、ナウマンゾウの産出はありませんが、この層は内湾や干潟など、陸域周辺に堆積した砂層・泥層からなる地層なので、ナウマンゾウの化石が産出してもおかしくはありません。